

どの児童も満足感を味わうことができる授業を目指して

— 器械運動領域において課題を共有し、課題解決を図る学び合いを通して —

南三陸町立入谷小学校 佐々木 大堯

1 授業づくりに関わる課題

これまでの自身の体育科の授業では、「できる喜びを実感させたい」という意識から、技能面に偏った授業展開になることが多かった。特に技能面に個人差が出やすい器械運動の領域では、課題を明確にし、課題に合ったアドバイスをしたり、場の設定を工夫したりするなどの学び合いの時間が不十分であった。その結果、器械運動が苦手な児童に対して、「できるようになった」という実感を持たせることが難しかった。

本校第5学年（9名）を対象とした器械運動領域の事前意識調査（5月・7月）では、「マット運動や跳び箱運動は好きですか」という質問に対し、肯定的な回答は6名、否定的な回答が3名見られた。実態調査（5月・7月）では、着手や視線などの技の課題を十分に理解できず、既習の技（開脚前転や台上前転等）が十分身に付いていない児童が見られた。

以上のことから、器械運動領域において課題を共有し、課題解決を図る学び合いを通して「できるようになった」という技能面や「友達のアドバイスや練習方法の良さが分かった」という思考面における満足感をどの児童にも味わわせていきたい。どの児童にも満足感を味わわせる授業の在り方を明らかにすることで、自身の授業づくりや児童の実態に関わる課題解決につながると考えた。

2 研究の目的と方法

(1) 研究の目的

本研究は、器械運動領域において課題を共有し、課題解決を図る学び合いを通して、どの児童も満足感を味わうことができる授業の在り方を明らかにすることを目的とする。

研究の目的に迫るために、以下の手立てを講じる。

① 自己の技の課題を明確にし、全員の課題を共有させるための学び合い【手立て1】

自己の技の課題を明確にさせるために、タブレット端末を活用しながら示範動画と事前に撮影した自己の動きを比較させる。また、児童から技の課題を取り上げながらホワイトボードに示し、意識したい課題に名前磁石を貼らせることで、全員の課題を共有させる。

② 課題に合った練習方法を明確にし、アドバイスや場の設定を工夫させるための学び合い

【手立て2】

課題に合った練習方法を明確にし、アドバイスや場の設定を工夫させるために、学習カード（技のポイントや課題に応じた練習方法等を記載）を活用しながら課題解決させる。また、互いの課題を明確にしながら練習させるために「肘を伸ばす」「視線はマット」など、自己の課題を友達に伝えてから取り組ませる。

(2) 検証方法

本研究の有効性について、以下の方法で検証する。

- ① 児童の活動の様子を観察し、記録したものを分析する。
- ② 事前及び事後の意識調査や実態調査から変容を見る。
- ③ 児童の振り返りの記述を分析する。

3 授業実践Ⅰについて

(1) 授業実践Ⅰの内容

器械運動（「マット運動」）の単元で授業実践を行った。本時の目標は、「補助倒立前転について、課題を共有し、アドバイスや場の設定を工夫しながら課題解決に取り組むことで、満足感を味わうことができる」である。

(2) 授業実践Ⅰの成果と課題（成果：○，課題：●）

- ① 自己の技の課題を明確にし、全員の課題を共有させるための学び合い【手立て1】
 - タブレット端末の2画面機能を活用しながら示範と自己の動きを比較させたことで、肘の動きや視線など、具体的な技の課題を見付けることができた（図1）。

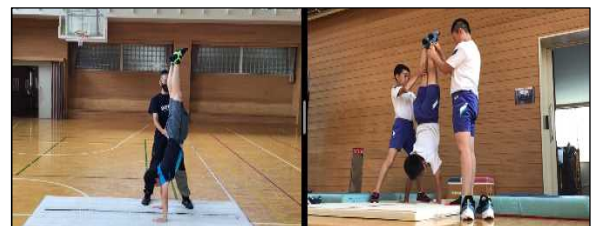


図1 2画面機能を活用した示範と自己の動きの比較

- 児童から技の課題を取り上げ、意識したい課題に名前磁石を貼らせ、全員の課題を共有させたことで、互いの課題を確認しながら学び合う姿が見られた（図2）。



図2 全員の課題を共有する場面

- 児童から「肘を伸ばす」などの技の課題を取り上げたが、補助倒立の際に肘が真っすぐに伸びきれていないなど、十分に意識しながら取り組むことができない児童も見られた。
- ② 課題に合った練習方法を明確にし、アドバイスや場の設定を工夫させるための学び合い
 - 【手立て2】
 - 学習カードを活用したことで、着手や視線の位置にシールを貼ったり、マットを置いて傾斜を作ったりするなど、場の設定を工夫する姿が見られた。また、課題を共有したことで、「肘を伸ばす」や「目線はマット」など、互いの課題を意識しながらアドバイスをする姿も見られた。
 - 児童の振り返りでは、「課題を友達に伝えることで見る人もどこを見れば良いか分かりやすい」「補助やアドバイスが上手にできた」など、課題を共有する目的や学び合いの良さを実感していた（図3）。

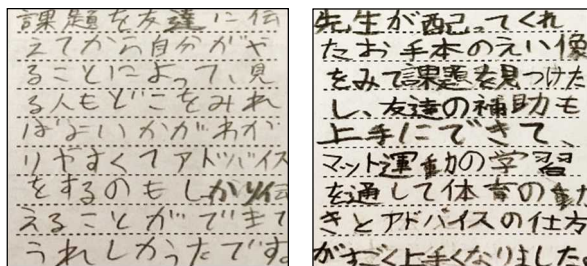


図3 課題を共有する目的（左）や学び合いの良さ（右）を実感した児童の振り返り

- 課題を意識しながら練習に取り組んでも、技のできばえが上達しない児童が見られた。技のこつをつかんだり、課題を解決したりしながら技のできばえが上達した児童を教師が見取り、必要に応じて全体に紹介し、学び合いを更に深めさせる工夫が必要だった。
- (3) 授業実践Ⅱの手立ての方向性について
 - ① 自己の技の課題を明確にし、全員の課題を共有させるための学び合い【手立て1】

児童に技の課題を十分に意識付けさせることが不十分であった。児童から技の課題を取り上げる際には、課題をより意識付けさせるために、「跳び箱を『ドン』と強く押す」「両足を『パン』とそろえて美しく着地する」など、技のこつを言語化させる。
 - ② 課題に合った練習方法を明確にし、アドバイスや場の設定を工夫させるための学び合い

【手立て2】

課題を意識しながら練習に取り組んでも技のできばえが上達しない児童が見られた。技のこつをつか

んだり、課題を解決したりした児童を教師が見取り、モデルとなる児童の動きや技のこつについて話し合わせたり、自身の練習方法に活用させたりすることで、学び合いを深めさせていく。また、児童の実態に応じて、教師が直接補助をしたり、動きを示範したりしながら個別の支援を行っていく。

4 授業実践Ⅱについて

(1) 授業実践Ⅱの内容

器械運動（「跳び箱運動」）の単元で授業実践を行った。本時の目標は、「伸膝台上前転について、課題を共有し、アドバイスや場の設定を工夫しながら課題解決を図ることで、満足感を味わうことができる」である。

(2) 授業実践Ⅱの成果と課題（成果：○、課題：●）

- ① 自己の技の課題を明確にし、全員の課題を共有させるための学び合い【手立て1】
 - 技の課題を取り上げる際には、『ドン』と強く踏み切る」など、技のこつを言語化させたことで、『ドン』と踏み切った方が良い」とアドバイスしながら課題解決を図るなど、授業実践Ⅰよりも課題を意識していた。
 - 技の課題を「腰を高く上げる」と「膝を伸ばす」に焦点化させた。「膝を伸ばす」という課題を持ったグループの児童の中には、「着地するまで膝を伸ばす」という課題を見いだすなど、導入時に共有した課題を細分化しながら学び合う姿も見られた。
- 技の課題を「腰を高く上げる」と「膝を伸ばす」に焦点化させることができたが、着手や着地など、児童自身が解決したい課題に取り組ませることが不十分であった。また、自己の能力に応じた適切な課題を選択することも難しかった。課題を焦点化させながらも、児童自身が解決したい課題や能力に応じた適切な課題に取り組ませるための働き掛けが必要であった。
- ② 課題に合った練習方法を明確にし、アドバイスや場の設定を工夫させるための学び合い

【手立て2】

- 課題ごとに練習方法を選びながら課題解決を図った。「膝を最後まで伸ばした方が良い」とアドバイスをしたり、腰を高く上げるためにゴムひもを使った練習方法に取り組んだりするなどの学び合う姿が見られた（図4）。



図4 膝を伸ばすことをアドバイスしたり（左）、腰を高く上げるためにゴムひもを使ったり（右）しながら学び合う様子

- モデルとなる児童を取り上げ、技の動きやこつについて話し合わせた。『ドン』と強く踏み切る」ことや「足をそろえながら伸ばす」ことを自身の練習方法に活用しながら学び合うことで、前時の伸膝台上前転と比べて、腰を高く上げたり、膝を伸ばしたりすることができるようになった児童が5名見られた（図5）。

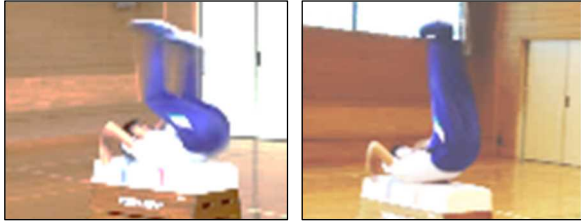


図5 前時（左）と比較して本時（右）の技のできばえが上達した児童の伸膝台上前転

- 技の動きやこつについて話し合ったり、話し合ったことを自身の練習方法に活用したりする時間を十分に確保することが難しかった。学び合いを深めさせるために、話し合いの時間と運動時間のバランスを吟味していくことが必要だった。

(3) 今後に向けて

① 自己の技の課題を明確にし、全員の課題を共有させるための学び合い【手立て1】

技のこつを言語化させたことで、児童はより課題を意識しながら練習に取り組むことができた。また、技の課題を焦点化させたことで、児童自身が課題を細分化しながら学び合う姿も見られた。今後は、児童自身が解決したい課題や自己の能力に応じた適切な課題を選択し、主体的な学びに十分につなげることができる課題設定の在り方について吟味していくことが必要である。

② 課題に合った練習方法を明確にし、アドバイスや場の設定を工夫させるための学び合い

【手立て2】

モデルとなる児童の動きや技のこつについて確認し、自身の練習方法に活用しながら学び合うことで、前時よりも技のできばえを上達させる児童が多く見られた。モデルとなる児童を取り上げながら動きや技のこつについて話し合う際には、「技の課題を解決するために、みんなで意見を出し合う」などの話し合いの目的を明確にするとともに、話し合ったことを自身の練習方法に活用する時間を更に確保していくことが必要である。

5 研究結果と考察

研究主題の「どの児童も満足感を味わうことができる授業」について、授業実践Ⅰ及び授業実践Ⅱを通して、「できるようになった」という技能面や「友達のアドバイスや練習方法の良さが分かった」という思考面における実感をどの程度高めることができたかを検証した。

(1) 授業内での児童の活動の様子から

- 導入時に取り上げた課題について、特に意識したい課題に名前磁石を貼らせ、全員の課題を共有した。全員の課題が貼ってあるホワイトボードを確認し、「目線はマット」「強く踏み切る」など、課題を明確にしながらアドバイスをしたり、跳び箱台やマットを活用したりするなど、場の設定を工夫する姿が見られた。「友達のアドバイスのおかげで自信を持って取り組むことができた」「課題を解決するのに、自分にはゴムひもを使った練習方法が良かった」など、アドバイスをしたり、課題に応じて練習方法を選んだりしながら課題解決を図ることの良さを感じていた。

- 順次接触の感覚が身に付いていないことが原因で、台上前転を安定して行うことができない児童が見られた。教師が直接、「踏み切りの音が聞こえるように、『ドン』と強く踏み切る」ことをアドバイスしたり、踏み切る動きを示範したりした。個別の支援の前は、頭頂部が跳び箱台に着いていたが、技を繰り返すうちに腰が高く上がり、後頭部から肩、背中と順に接触し、安定した台上前転ができるようになった（図6）。

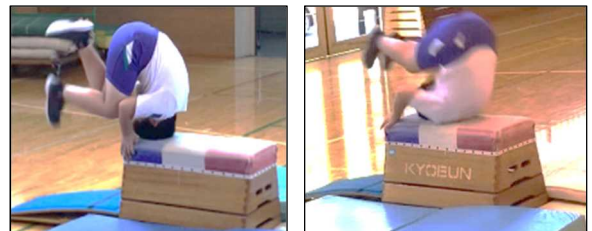


図6 個別の支援により、前時（左）と比べて本時（右）の方が安定した台上前転ができるようになった児童

- 授業実践Ⅱでは、課題を焦点化させるため、課題ごとに適した練習方法を選びながら課題解決に取り組ませた。課題ごとに練習方法を設定していたため、取り組みたい練習方法を選ぶことができなかったことも考えられる。また、自己の能力に応じた適切な課題や練習方法を選ぶことができず、学び合いの中で技の上達が難しい児童も見られた。課題設定をどのように行わせ、その課題を解決するために、どのような学び合いを行っていくのかを吟味していくことが必要である。

(2) 意識調査の結果から

- 授業実践Ⅰ及び授業実践Ⅱ終了後における事後の意識調査（7月20日及び11月1日実施）では、「マット運動は好きですか」「跳び箱運動は好きですか」という質問に対して、肯定的な回答が増えた。授業実践Ⅰ終了後は、「できると楽しい」などの技能面の理由から3名の児童が肯定的な回答になった。授業実践Ⅱ終了後は、「できると楽しい」という技能面だけではなく、「アドバイスをもらってうれしい」などの思考面の理由から2名の児童が肯定的な回答となった。児童にとっての満足感とは、技能面における実感が大きいことが分かった。

が、学び合いの中で思考面における実感も高まっていることが分かった（図7）。

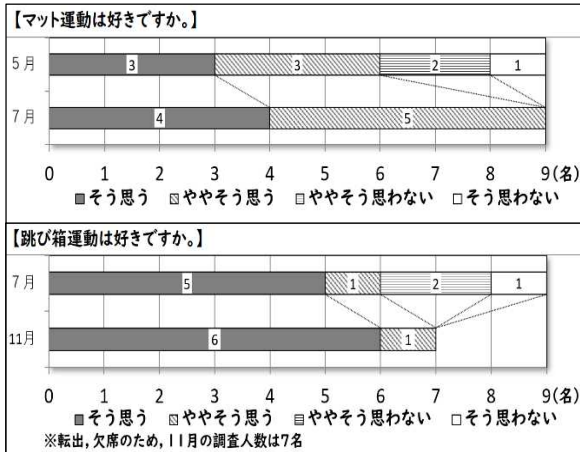


図7 授業実践Ⅰ（「マット運動」）及び授業実践Ⅱ（「跳び箱運動」）における意識調査の結果

- 事後の意識調査（11月1日実施）の結果では、「授業のはじめに、自分の課題を見付けて臨んできましたか」という質問に対して、全児童が「そう思う」と回答した。タブレット端末の2画面機能を活用しながら示範動画と事前に撮影した自己の動きを比較したことで、本時の課題を明確にしながら取り組むことができていたことが分かった。また、「技のこつを理解し、練習方法を考えたり、話し合ったりしながら課題を解決しようとしてきましたか」という質問に対しても、全児童が肯定的に回答した。5月当初と比べて結果に大きな変容は見られないが、11月の自由記述では、「学習カードの練習方法が参考になった」「ゴムひもを使った練習が良かった」など、思考面における実感が高まった児童が増えたことが分かった（図8）。

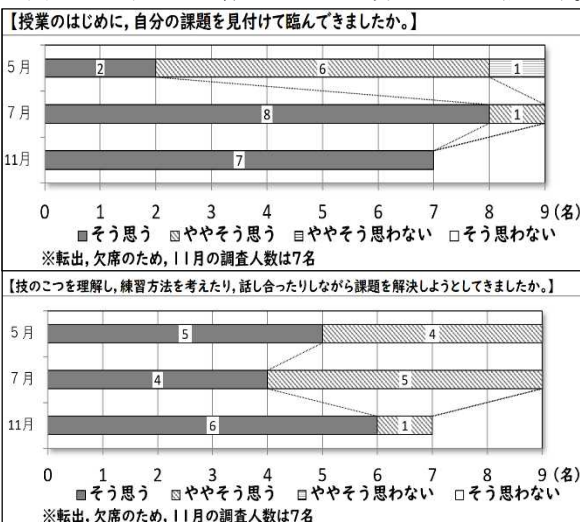


図8 手立て1（上段）及び手立て2（下段）に関する事後の意識調査の結果

- アドバイスをする際に「伝えたい言葉が思い浮かばない」などの意見もあった。互いの課題に沿ってどのようなアドバイスをすれば良いのか、より良いアドバイスの仕方について指導していく必要があることが分かった。

（3）児童の振り返りの記述から

- 授業実践Ⅱ（「跳び箱運動」）終了後における単元の振り返りでは、『ドン』や『バン』など、音を使ったアドバイスをした「友達から勢いを付けろ」というアドバイスできれいに跳べてうれしい」など、課題解決を図る過程の中で、満足感を味わうことができた児童が見られた（図9）。

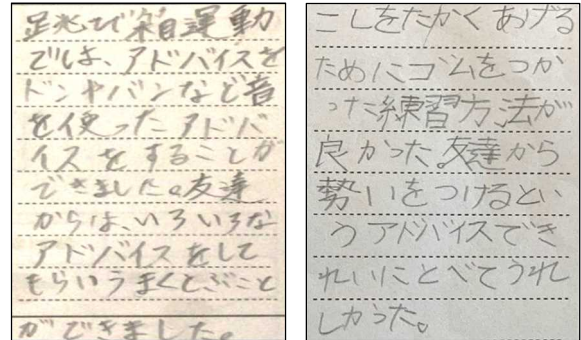


図9 授業実践Ⅱ終了後における単元の振り返り

- 個別の支援を要する児童や運動が苦手な児童は、「できた」「できるようになった」という技能面を重視しているため、アドバイスや練習方法の良さという思考面について振り返ることが難しかった。そのため、学び合いや振り返りの際に、「友達のどのようなアドバイスを参考にしたのか」「どのような練習方法が自分の課題に合っていたか」など、児童の実態に応じて、思考面に係る教師の声掛けを更に意識して行っていく必要があった。

（4）今後の課題

① 主体的な学びとなる課題設定について

児童から技の課題を取り上げる際に、課題を焦点化させることができたが、児童自身が行いたい課題や自己の能力に応じた適切な課題を選ばせることができず、主体的な学び合いに十分につながらないときもあった。児童自身にとって必要感があり、自己の能力に応じた適切な課題を設定させるための工夫が必要である。

② 学び合いを深めさせるための教師のコーディネート力の向上

モデルとなる児童を取り上げた際に、技のこつや動きについて話し合わせる時間や話し合ったことを自身の練習方法に活用させる時間が十分ではなかった。学び合いの中で、「何のために話し合うのか」「話し合いがどのように生かされていくのか」という目的意識を明確にさせる必要がある。また、児童のどのような技や意見を取り上げたいのかという教師の意図を明確にし、その意図に合わせた発問を行うなど、教師が児童の学びをコーディネートする力も高めていく必要がある。

【図表等の許諾について】

図1～9は、授業実践の中での児童の様子と振り返りの一部、授業実践前後の意識調査の一部である。児童が特定できないようにすることとし、所属校の校長及び該当する保護者から使用許諾を得た。